

マグネシウム・
スウィング



晴海まどか

マグネシウム・スウィング

エンドレスにたゆたうサクスのリズムに乗せて、「マグネシウムリボン」という単語を何度も舌の上で転がした。マグネシウムリボン、マグネシウムリボン。

近所の多摩川河川敷は、夕方になると犬の散歩をする主婦や駆け回る小学生でにぎやかになる。少し離れたところにはグラウンドがあったりもして、少年野球のかけ声も聞こえてくる。だがそれらは、今の私の集中力にはなんら影響しない。占領したベンチで、私の全神経は手のひらの中にあるものだけに注がれている。

ラベルがなく表面に傷一つない、高さ五センチばかりの茶色い遮光瓶。

大きく息を吸って、止めた。そのままプラスチック製の黒い蓋をゆっくりと回し開ける。丸い瓶の口には、しずくを一滴ずつ垂らすための半透明のゴム栓がはまっていた。以前、何かの折に母に教えてもらったのだが、このゴム栓はドロップ栓と呼ぶそうだ。ドロップ栓、なんとも甘くカラフルな響き。

手術を開始するような気持ちで、開けた瓶の口をティッシュペーパーで丁寧に拭き、ドロップ栓にぐっと爪をかけた。ドロップ栓は、ワインのコルクのように瓶に抵抗しながら、でも意外とたやすくすぽっと抜けた。広げたティッシュペーパーの上にごろんと転がされたドロップ栓は、透明な染みを広げてベンチの茶色を透かす。摘出完了、なんちゃって。

蓋とドロップ栓がなくなった瓶は、のっぺらぼうのガラスの塊に見えた。ドロップ栓がなくなったせいか瓶口の曲線が強調され、女性の首から肩にかけてのなめらかな線を彷彿とさせる。そのくせ、油断したら嘔みつかれそうな弾丸のような鋭い光沢をも兼ね備えていた。瓶のくせに生意気な。手中の小瓶を負けじと睨み返していたら、唐突に色鮮やかなイメージが脳内で再生された。どこかでこんな小瓶を見たことがある。――そう、不思議の国でだ。

体が小さくなったアリスは小瓶に入り、自分が流した涙の川に流されて不思議の国の奥へ奥へと進んでいく。アリスを乗せた瓶は涙の海に沈みそうで沈まず、瓶の中のアリスの顔は揺らめく波間から出たり沈んだりを繰り返す。アリスは瓶の内側に両手をつき、憧れるように外を見つめる。中も同じように滑らかなのだろうか。瓶の曲線に沿って親指の腹を滑らせた。つるんとした瓶の内側から見た世界は、どんな色をしているんだろう。瓶を持っていない方の手をスカートのポケットに突っ込んだ。忍ばせていたのは、一センチほどの薄鈍色の金属片、マグネシウムリボンのかけら。私はつまんだそれを、そっと瓶の中に落とした。

吹奏楽部でサクスを始めた。そう話したら、伯父がCDをくれた。『グレン・ミラー名曲選』。スウィング・ジャズの王様、グレン・ミラー。軽快でいてどこか物憂げでそれでいて艶めかしく揺れるサクスやトランペットのジャズサウンドは、私が今まで感じたことのない世界の香りで満ちていた。その音色はたちまち私を虜にし、いかしたおじさま、グレン・ミラーは私の王子様になった。耳が空いていればどこかまわすイアフォンを突っ込み、ミラー様の音楽に酔いしれた。しまいには、イアフォンがなくてもミラー様の音楽を脳内で完全に再生できるようになった。授業中でもお喋りをしていても食事をしていても、私はいつだってミラー様の音楽を堪能でき、終わりのないスウィングのリズムに身をゆだねる。一九四四年にこの世を去られたミラー様のセピア色の写真を見せると、友人たちは「オヤジじゃん」とだけコメントした。わかってない、全然わかってない。みんなが夢中な尻の青いアイドルに、こんなに心震える音楽は作れやしないだろうに。

そんなこんなで、私のあだ名として『ミラー』がすっかり定着してしまった五月のある日。同じクラスの蓮田(はずだ)克也(かつや)が、教室の隅の席で、茶色いガラスの小瓶を光にかざしているのに遭遇した。放課後の、美化委員会の集まりのあとのことだった。

蓮田克也はクラスで浮いていた。というかそのことすらどうでもよさそうなくらい、周囲に興味を持っていないように見えた。俺になぞかまうなど言わんばかりに、近づく者があれば容赦なく睨み、そして無視する。もっとも、十三歳にして身長が一八〇センチ近くあり、肩幅も広くてがたいがい克也は、その容姿だけで十分にクラスメイトを威圧していた。加えて、他校の不良たちと年中喧嘩をしているとも噂され、生傷を隠す絆創膏が腕や顔に貼られていることも珍しくなかった。積極的に近づく者などいるわけない。

そんな克也の太くてごつごつした親指と人差し指に、つままれるように小瓶が挟まっていた。毒薬でも入っていそうな無機質な見た目のくせに、大きな手の中にあるそれはミニチュアのおもちゃのようで、なんだかわいらしくさえあった。なんのラベルもない、無愛想な茶色い遮光瓶。その小さな瓶は窓から差し込む夕日を反射して、わざとらしいくらいにキラキラしていて、笑えるくらいに克也に似合っていなかった。

教室の入り口でそんな克也を凝視していたら、当然ながら目が合った。小瓶の中で、透明な液体がたぶんと揺れたような気がした。ミラー様の陽気な音楽が私をあと押しし、好奇心が恐怖心を負かした。

「何が入ってるの？」

尋ねると、克也は無表情で私を睨めつけ、だがぼつりと答えた。

「塩酸」

先週の理科の授業で、試験管の塩酸にマグネシウムリボンを入れる実験をした。塩酸の中で、マグネシウムの塊は入浴剤のよう

にぶくぶくと泡を発生させた。マグネシウムは塩酸から塩素だけを抱き取り、水素を泡にして突き放すのだ。さようならH₂。

「その瓶にマグネシウムリボンを入れたら溶けるの？」

克也はわずかに目を見開いて、口の端をわずかに上げた。もちろん。

学校帰りに克也を見かけたのは、その少しあとのことだ。

通学路の途中にある多摩川河川敷。天気がよいと、そこに時々克也がいることに気がついた。克也はでんと足を広げ、偉そうな態度で古びたベンチを占領する。その手には、いつもあのおもちゃのような茶色の小瓶が収まっていた。克也は小瓶を目の上でかざし、ときおり蓋を開けては鼻を近づけた。態度がでかいことには変わりはないが、そこにいつもの威圧感や近寄りがたさはみじんもなく、小瓶をころころと転がす様は微笑ましくすらあった。手乗り文鳥を指で撫でているのに、かわいがっているのを知られるのが恥ずかしくて無表情になっている、といった空気感。

ミラー様のメロディーに合わせて軽くステップしながら、面白半分に土手の上から声をかけた。何してんの？ 克也はめんどくさそうに、でも私を無視せずぶっきらぼうに言葉を返してきた。私はそれが愉快で、翌日もまたその翌日も克也に声をかけ、いたって短い、いつだって同じその台詞を待つのだった。うるせー、塩酸かけるぞ。

克也が評判のよくない上級生にシメられた、と聞いたのは今朝のことだ。不良じみているくせに、なんだかんだで皆勤賞だった克也が珍しく学校を休んでいた。

放課後になって、誰にも言わず噂の現場である体育館裏に行ってみた。面白いくらい期待どおり、側溝のすぐ近くに例の小瓶が転がっていた。小瓶は傷一つなく、砂にまみれた側面を指で拭いたら元気だよと明るく笑うようにキラッと太陽を反射した。中の液体も、万事問題なしと自己主張するようにゆらりとうねる。ご無事なようで何よりです。

瓶の中に落ちたマグネシウムリボン、液体の表面張力にほんの少し抵抗を受けた。が、すぐに打ち負かし、その底にすんと落ちた。

マグネシウムリボンは、瓶の底に沈んだまま無言だった。

ふうっと止めていた息を吐き出した。久しぶりに吸い込んだ空気は甘くてすっとした匂いを含んでいる。マグネシウムリボンをはらんだままの液体をひと揺らしすると、匂いがわずかに強くなった。

「塩酸だとか言って、バカみたいだと思ってんだろ」

いつの間にか、背後の土手に克也が立っていた。紫色に変色した右目の周りはまさに目パンダで、頬には大きな絆創膏、唇の端も切れて赤く腫れている。手の甲や指にも乱暴に巻かれたテープが見えた。でも、克也の表情にいつもの陰しきはなかった。疲れていて気まり悪そうな、でもそれすらどうでもよさそうな覇気のない目が私を見下ろしている。

「これ、何のアロマオイル？」

「ジュニパーベリー」

何それ。ジュニパーって名前の樹の実で、ジンの香りづけに使われてるのと同じ香料。ジンってお酒の？ そう、お酒の。

いつの間にか脳内で停止ボタンが押されていたらしい。思い出したようにミラー様のジャズサウンドが降ってきて、すっすっと左右に揺れながら落ちる枯葉のようにサクスがスウィングを始めた。私の脳がチョイスしたのは明るい長調のジャズ、グレン・ミラーの代表曲、茶色の小瓶。ミラー様がスウィング・ジャズに編曲したことで有名になったこの曲は、もともとはイーストバーン作曲の歌である。貧乏になってもお酒をやめられない、アルコール依存症の夫婦の歌だ。茶色の小瓶とは洋酒の瓶のことなのだ。

手にした小瓶と、満身創痕の克也の顔を見比べた。

「悪くないと思うよ」

目をしばたかせてから、弾けたように克也が笑った。

ドロップ栓はそのままに、マグネシウムリボンを飲み込んだままの瓶の蓋をきゅっとしめた。辺りに漂うジュニパーベリーの残り香を思いっきり吸い込んでみる。わずかな甘みといけすかなささえ感じる薬品っぽさのある香りは、ずっと私に溶け、サクスの音色に変わっていった。

揺らめくジャズサウンドがほんの少し色鮮やかになった、ような気がした。

〈完〉

パプー公開版 2013/5/29

晴海まどか 著